

広告

保護者のみなさまへ

「PG12」を知っていますか？

「小学生には助言・指導が必要」な映画です。

2020年、史上最高の興行収入を記録したのが『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』。この作品はPG12として公開された。映画倫理機構（映倫）ではあらゆる世代に映画を楽しんでもらうため、劇場公開される映画に4つの区分（G、PG12、R15+、R18+）を設けている。その一つ、PG12とはどういうもので、同区分の映画をどのように楽しめばいいのか、社会学者、映画監督、母親、それぞれの立場から語っていただいた。



劇場版「鬼滅の刃」無限列車編
絶賛公開中
© 吾峠呼世晴 / 集英社・アニプレックス・ufotable



ブレイブ 群青戦記—
絶賛公開中
©2021「ブレイブ 群青戦記」製作委員会
© 笠原真樹 / 集英社

「制限」するのではなく「助言と指導」を求める区分

吉永 2020年の映画市場は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響をまともに受け、観客動員も興行収入も前年の半分くらいと厳しいものとなりましたが、明るいニュースになったのが映画「劇場版「鬼滅の刃」無限列車編」（2020年）の公開です。観客は大きなスクリーンと大音響で鑑賞する映画の楽しさを改めて感じたのではないかと思います。

本木 アクションシーンなどが印象的で、また剣劇も新鮮でした。

優木 2人の子とも一緒に映画館に行きましたが、他者への思いやりだと友情や親子の愛などのテーマが盛り込まれていて感動できました。

吉永 お子さんの反応はどうでしたか？

優木 上の子はラストシーンで感動して泣いて、「面白かった」と、わりと大人っぽいリアクションでした。もしかすると、下の子には怖いシーンがあったのかもしれませんが、映画は気に入ったようで、竹輪をくわえて走り回ったりして遊んでいます。

吉永 この作品もそうですが、同じくヒットした「ブレイブ 群青戦記」（2021年）「銀魂 THE FINAL」（2021年）もPG12に区分されています。

優木 12歳未満に観せちゃいけないの？親が付き添わなければならぬの？と気になって調べたら、そうではないらしいと分かりました。

吉永 R指定はご存知だと思いますが、R15+やR18+といったR指定のRは「制限」を意味する英語（Restricted）の頭文字。PGは「ペアレンタル・ガイダンス」の略です。

優木 どういう経緯で始めたシステムなのでしょう？

吉永 ホラー映画を観た子どもが卒倒するといったようなことがあって、強い恐怖がどのような精神的影響を及ぼすのか、ということが論じられたのがPG導入のきっかけと聞きます。これは児童心理に詳しい坂元先生にお聞きしたいのですが、大人はホラー映画で絶叫してもすぐに忘れられますが、子どもはそれとは異なるのでしょうか？

坂元 発達途上にある幼児は第三者の視点と空想の区別のため、現実と空想の区別をつけにくく、小学校低学年まではキャラクターが実在していると思う子どもも少なくありません。8歳くらいまでは非現実的な描写でも自分のことにならなくて認識してしまい、身体や生命への脅威として感じる場合があります。

「刺激的で小学生の観覧には不適切な内容も一部含まれている」ので、「12歳未満の年少者の観覧には、親又は保護者の助言・指導が必要」というものです。

優木 これって日本独自のシステムなんですか？

吉永 設定は少しづつ異なりますが、映画のレーティングは世界的なもので、例えば「ハリ・ポッター」シリーズのうち4作品はアメリカではPG13（13歳未満の鑑賞には保護者の強い同意が必要）という区分です。作品によっては、日本より厳しい区分が設定されている国も少なくありません。

本木 第一義的に表現の自由をどれだけ広げていくかということがあります。私自身はPGを避けよう、と意識したことはありません。

優木 本木監督に限らず、子どもも観る映画の作り手には、戦いのシーンをホワッとソフトなものにするという感覚はないのでしょうか？

本木 アクションはエンターテインメントの大きな核です。演出する側には、戦いがあからこそ友情や正義というメッセージが強く伝わるように考え方もあります。もちろん、子どもも繊細な人たちにトラウマを与えるのは本意ではないでしょう。バランスをどうとるか、どこまで表現するか、私に限らず、ワンカットずつ綿密に検証しているはずですよ。

吉永 例えは「The Lady アウンサンスリーパー」ひき裂かれた愛（2011年）もぜひ観てほしい素晴らしい作品なのですが、銃器による殺傷と未成年者の飲酒の描写があるということでPG12になりました。一定の配慮が必要で

つつ映画の表現の幅を狭めたいという観点から生まれたものですが、本木監督は創作にあたり、意識されますか？

本木 第一義的に表現の自由をどれだけ広げていくかということがあります。私自身はPGを避けよう、と意識したことはありません。

優木 本木監督に限らず、子どもも観る映画の作り手には、戦いのシーンをホワッとソフトなものにするという感覚はないのでしょうか？

本木 アクションはエンターテインメントの大きな核です。演出する側には、戦いがあからこそ友情や正義というメッセージが強く伝わるように考え方もあります。もちろん、子どもも繊細な人たちにトラウマを与えるのは本意ではないでしょう。バランスをどうとるか、どこまで表現するか、私に限らず、ワンカットずつ綿密に検証しているはずですよ。

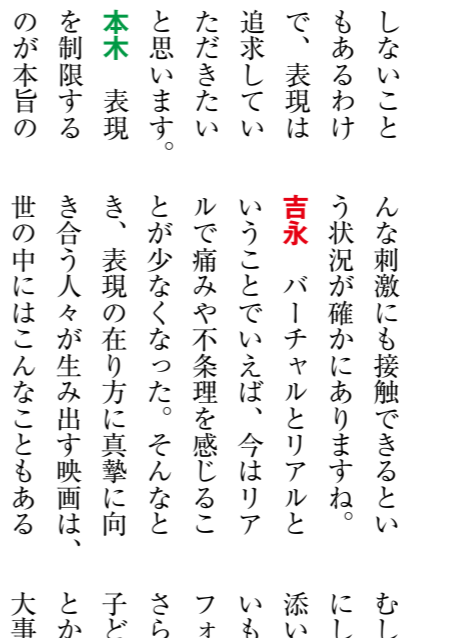
吉永 例えは「The Lady アウンサンスリーパー」ひき裂かれた愛（2011年）もぜひ観てほしい素晴らしい作品なのですが、銃器による殺傷と未成年者の飲酒の描写があるということでPG12になりました。一定の配慮が必要で



本木克英
映画監督（日本映画監督協会専務理事）
『てなもんや商社』（1998年）で監督デビュー後、多彩なジャンルの映画を手がける。主な作品は『釣りバカ日誌』シリーズ11作（2000年）～13作（2002年）、『ゲゲゲの鬼太郎』（2007年）、『大と私の10の約束』（2008年）、『超高速！参勤交代』（2014年）、『空飛ぶタイヤ』（2018年）、『映画少年たち』（2019年）など。最新作『大コメ騒動』が公開中。



優木まおみ
マルチタレント
2002年芸能界デビュー。グラビア、キャスター、レポーターなどマルチタレントとして活躍。現在は女性誌のモデル、報道番組のコメントーターなどを務める。バラエティ番組、女性誌のモデル、最近では、情報番組のコメントーターを務めるなど活躍の場を広げている。2013年結婚。2014年長女、2017年次女を出産。



坂元章
お茶の水女子大学 基幹研究院 人間科学系 教授
2004年お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科教授に就任。専門は社会心理学、情報教育。「メディアと人との関わり」を研究課題とする。日本シミュレーション＆ゲーミング学会理事、東京都青少年問題協議会委員、特定非営利活動法人コンピュータエンターテインメントレーティング機構（CERO）理事。

メディア・リテラシーを学ぶ機会にも

あつたとしても、そのシーンがなければ、作品として成立

吉永 PG12には少し大人な映画作品に触れてもらうことで子どもたちの成長を促すという側面もあるのですが、他方、保護者として心配なのが暴力的なシーンや言動をまねるといった悪影響でしょう。

本木 この映画はどうしてPGなの？という話題から「主人公たちがヘルメットを被らずバイクに乗るシーンがあるから」と話す。つまり、これは映画だから、と判断できるまでは保護者の助言が必要だということでしょうか。

坂元 勧善懲悪のヒーロー物で、悪役の宇宙人を倒してハッピーエンドになったが、宇宙人はやむを得ない理由で地球に舞い降りたのかもしれない、親や子がいて、嘆き悲しんでいるかもしれない、映画

は現象の一部しか扱っていない、といった話題から、メディア・リテラシーを学ぶ機会にもできるはずですよ。

本木 振り返れば、「ゲゲゲの鬼太郎」（2007年）を撮るとき、子どもの感性は大人以上だと、自分に言い聞かせていました。子どもの感性は鋭いですし、大人が事の善悪についてどう思っているか、ということにも敏感です。

坂元 世界的な人権意識の高まりの中、どんな人も傷つけられるべきではないという声があがり、意識調査を見ても暴力に対する見方が厳しくなっています。こうした世の中の価値観の変化を反映してテレビなどで表立って見える暴力が減少する一方、インターネットは無法地帯で、ど



モデレーター 吉永みち子
一般財団法人映画倫理機構 映画倫理委員会委員長
ノンフィクション作家
日本初の女性読者新聞記者。株式会社日刊現代を退社後、専業主婦を経てノンフィクション作家として復帰。1985年、「気がつけば騎手の女房」で第16回大宅社ノンフィクション賞を受賞。政府税制調査会、地方分権改革推進会議、郵政行政審議会、外務省を変える会などの委員を歴任。

映画 4 区分の概要

- G** **どなたでもご覧になれます**
年齢にかかわらず誰でも観覧できる
G: General Audience (すべての観客)の略号
- PG12** **小学生には助言・指導が必要**
12歳未満の年少者の観覧には、親又は保護者の助言・指導が必要
PG: Parental Guidance (親の指導・助言)の略号
- R15+** **15歳以上がご覧になれます**
15歳以上(15歳未満は観覧禁止)
R: Restricted (観覧制限)の略号
- R18+** **18歳以上がご覧になれます**
18歳以上(18歳未満は観覧禁止)
R: Restricted (観覧制限)の略号

映倫 EIRIN
一般財団法人 映画倫理機構 (映倫)

表現の自由を護り、青少年の健全な育成を目的として映画界が自主的に設立した第三者機関。映画が観客や社会に与える影響の大きさを自覚し、法や社会倫理に反し、とりわけ未成年者の観覧につき問題を生じうる映画については社会通念と映画倫理諸規程に従って自主的に審査している。また映画製作者が外部からの干渉を排除して自由に製作できる環境を作るとともに、観客の見る自由を保障し、さらに次世代を担う未成年者がその成長に際し、対応を誤ることのないよう配慮している。